資料　3

国語分科会で今後取り組むべき課題について（抜粋）

第１　敬語に関する具体的な指針作成について

以下，敬語に関する具体的な指針作成が，「今後取り組むべき課題であると考えられた理由」及び「検討するに当たっての態度・方針」について述べる。

１　「敬語に関する具体的な指針作成」が必要な理由

（１）「敬語の必要性」と「敬語使用の実態」

分科会で「敬語に関する具体的な指針作成」が必要であると考えた理由の１点目は，以下で紹介する世論調査で，今後とも敬語が必要であると考えている人が極めて多いにもかかわらず，現実の敬語使用の実態がその意識の高さに見合うようなものとなっていないと判断したためである。

敬語については，平成１５年度文化庁「国語に関する世論調査」（平成１６年１月調査）において，「今後とも敬語が必要である」と回答した者が96.1%に上るという結果が出ている。この96.1%の内訳は，必要だと思う（67.8%），ある程度必要だと思う（28.3%）であった。「今後とも敬語が必要である」と回答した者は，96.1%という数字が示すように，世代を問わず高い割合に上るが，女性の３０代，４０代は，特に高く，３０代で99.0%，４０代で99.5%という数字が出ている。

平成４年６月に実施された総理府広報室の「世論調査」でも全く同じ質問をしているが，「今後とも敬語が必要である」と回答した者は93.7%であり，内訳は，必要だと思う（48.6%），ある程度必要だと思う（45.1%）という結果であった。二つの調査結果を比較すると，ある程度必要だと思うが１７ポイント弱減って，必要だと思うが２０ポイント弱増えていることが注目される。ある程度ではなく，はっきりと敬語が必要だという意識を持つ人が増えている。

この変化については，敬語についての意識が高まったととらえることもできるが，一方で，不適切な敬語の使い方が広がっていることは，つとに指摘されているところであり，このような敬語使用の実態と考え合わせれば，適切な敬語が使われなくなってきていることに対する問題意識が数字に反映されたと見ることもできる。

その意味で，現在は，敬語の必要性を多くの人が感じつつ，適切な運用ができない状況にあるとも考えられる。敬語の適切な運用を難しくしている要素には様々なものがあるが，特に大きいのは人間関係を的確に把握し，それに基づいて，コミュニケーションを円滑化し，多様な人間関係を築いていくのにふさわしい表現を選択しなければならない点にあると言えよう。分科会では，ここを踏まえて，敬語が必要だと感じているけれども，現実の運用に際しては困難を感じている人たちに対して，その適切な運用に資する分かりやすい指針が必要ではないかと考えた。

なお，平成１３年度文化庁「国語に関する世論調査」（平成１４年１月調査）では「日本人の日本語能力の向上のためには，基盤としてどのような知識を増やすことが必要だと思いますか。」と尋ねているが，「敬語や配慮の表現に関する知識を増やす」が69.9％で第１位となっている。第２位は「漢字・漢語の知識を増やす」で58.2％である。また，平成１４年度文化庁「国語に関する世論調査」（平成１４年１１月調査）の「日本人の国語力について，あなたは，社会全般においてどのような点に課題があると思いますか。」という質問には，１１の選択肢がある中で，１位から３位までを挙げれば「考えをまとめ文章を構成する能力」(36.0%)，「敬語等の知識」(35.3%)，「説明したり発表したりする能力」(33.1%) という結果が出ている。

（２）答申「現代社会における敬意表現」の理念の普及

分科会で「敬語に関する具体的な指針作成」が必要であると考えた理由の２点目は，平成１２年１２月に国語審議会から答申された「現代社会における敬意表現」が広く普及していないのは，具体的な運用の場面で使いにくいところがあるからではないかと判断したためである。

上記答申は，「はじめに」で，「国語審議会は現代社会の言葉遣いの在り方を考える上で重要な概念として「敬意表現」を提唱する。敬意表現とは，コミュニケーションにおいて，相互尊重の精神に基づき，相手や場面に配慮して使い分けている言葉遣いを意味する。それらは話し手が相手の人格や立場を尊重し，敬語や敬語以外の様々な表現から適切なものを自己表現として選択するものである。」と述べ，さらに「現代社会における言葉遣いの核を成すものは，コミュニケーションを円滑にする言葉遣いとしての「敬意表現」であるとの認識に立ち，敬意表現を中心として，言葉遣いの在り方についてまとめたものである。」と述べる。

敬語は，先人の知恵が蓄積された大切な文化として受け継がれてきたものであり，社会生活において多様な人間関係を構築し，維持・発展させていく上で極めて重要な位置を占めている。分科会では，この点に配慮しつつ，答申で示された「敬意表現の理念」が現実の言語運用に生かせるような工夫が必要ではないかと考えた。

そのためには，例えば，答申に「敬意表現は，相互尊重の精神に基づき，多様な選択肢の中からその時々の相手や場面に合ったものを社会の慣習に照らして過不足なく選び取って使うものであるが，特に留意すべきは過剰にならないということである。また，気持ちの伴わない慇懃（いんぎん）無礼な使い方をして結果として相手に失礼になることを避けることなどにも留意すべきである。」という文章があるが，この中の，

＜多様な選択肢の中からその時々の相手や場面に合ったものを社会の慣習に照らして過不足なく選び取って使う＞
＜特に留意すべきは過剰にならない＞
＜慇懃無礼な使い方をして結果として相手に失礼になることを避ける＞

といったことを，実際のコミュニケーション場面において具体的に生かしていくにはどのような判断に基づいて考えていけば良いのか，場面に即しつつ，もう少し丁寧に示す必要があるのではないかと考えた。ただし，これをどのように具体化していくかについては今後更に検討が必要である。

なお，平成１０年６月に第２１期国語審議会が「新しい時代に応じた国語施策について（審議経過報告）」を出しているが，その中で「国語審議会は次期の審議で具体的な敬意表現の標準を示すことに取り組むことが予定されているが，その場合も語形面での誤りを正すだけでなく，運用面の適切性についても扱っていくことが必要と思われる。すなわち，現実に行われている様々な敬意表現を整理して，平明な言い方を中心に複数の選択肢を掲げ，併せて頻度の高い誤用例についてはそれが誤りとされる理由を説明しつつ，想定される場面に応じた運用の指針を掲げることになろう。」と述べている。答申の理念を広く普及していくためには，ここに示されている考え方についても再度検討する必要があると思われる。

２　「敬語に関する具体的な指針作成」の検討に当たっての態度・方針

この問題を検討するに当たっては，次のような態度・方針によるべきであろう。

（１）信頼すべき実態調査や意識調査などの結果を踏まえ，世論に耳を傾け，社会一般に納得され支持されるように努めるとともに，専門家の意見を十分に参考とすることが必要である。これらの調査については専門の研究機関である独立行政法人国立国語研究所の協力が不可欠であろう。

（２）敬語は，日本の大切な文化として受け継がれてきたものであり，一般の社会生活において極めて重要な機能を果たしていることを認識しつつ，単なる「敬語のマニュアル作り」を目指すのではなく，答申「現代社会における敬意表現」の趣旨を踏まえ，その趣旨が確実に生かせるような「具体的な指針」の作成を目指すべきである。

（３）指針を提示するに際しては，全体として，正しい言い方・誤った言い方というような示し方をするよりも，「既に慣用と認められる言い方」「適当と認められる言い方」「適切でない言い方」というような形で示していくことが望まれる。

（４）具体的な実例を示すことを心掛け，なるべく実際の運用場面を設定して，語句の形でなく文の形で提示するように配慮する。また，言葉を使うときの態度や所作などについても検討の対象として考慮したい。

（５）敬意表現という言い方も含め，現在，一般に用いられている尊敬語・謙譲語・丁寧語といった名称や分類の仕方についても，分かりやすさという観点から改めて検討を加える必要がある。